

坂本龍馬

山岡荘



監修 〓 桑田忠親 / 村上元三 / 尾崎秀樹

山岡莊八全集 32

坂本龍馬



山岡莊八全集 32

坂本龍馬

著者 山岡莊八

装幀 加山又造／蟹江征治

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二二
電話 東京〇三二九四五―二二二二(大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 大製株式会社
製函所 株式会社岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十八年十二月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八三 藤野稚子 ISBN4-06-129192-0 (9) (文芸)
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えします。

目次

図説・坂本龍馬（カラー）

黒船の巻

五

狂風の巻

三九

卷末特集

列伝・徳川家臣団〈35〉 松平容保 綱淵謙錠

四九

評伝・山岡荘八〈35〉 政治への傾斜 清原康正

四七

別刷 タイム・トラベルの楽しみ〈35〉 宮脇俊三

插
繪

原
田
維
夫

坂本龍馬

黒船の巻
狂風の巻

黒船の巻

突風前夜

この年、嘉永六（一八五三）年の夏は、雨がひどく少なかった。五月二十日から照りつづけて、七月の二十日までの二ヶ月間に、ただ一度、六月十一日の夜から十二日の朝にかけて僅かにバラついただけで、江戸の街はひどい旱天に晒されたのだが、今日はまだ六月五日。

誰も別に、そのことから饑饉を連想する者もなく、あちこちの夏祭が賑やかに炎天下でつづいていた。

「おい、暑くてたまらぬ。神輿が行きすぎたら、その辺の麦湯店で休んでいこう」

大伝馬町の街角に立って、天王祭の神輿が二丁目の御旅所へ渡って来るのを見物していた二十あまりの緋の羽織を

着た若侍が連れをかえりみた。

「どうだ、土佐と江戸とどちらが暑い」

「べつに」

と、相手はボソリと答えて、折りから来かかった行列の先頭の幟に小手をかざした。

「べつに変らないというのか」

「土佐は、もっと雨が深い」

「では、江戸の方が暑いというのか」

「べつに」

また同じことを呟かれて、羽織の若侍は苦笑した。

「貴公がそうして神輿を見ている顔は、まるで怒っているようだ。そんなに眉間を寄せねば見えないのか」

「べつに」

答えた方は六尺近い長身で、いかにも無造作に、短い麻の単衣と稽古袴を着けていた。連れは二人だけではない。一分の隙もない上布の緋羽織の侍の、妹であろう、大柄な色白の娘と、もう一人、眼の鋭いがちりとした体軀の二十三、四の侍を連れている。

三人の男の中ではない、土佐の気候を訊かれた長身のがいちばん若い。どこかにまだ体の固まりきらぬ稚さがにじんでいる。

「ホホホホ」

と妹らしい娘が笑った。

「坂本さんは、眼が近いのですね。道場でも少し離れると、あんな顔をなさいます。ねえ、坂本さん」

しかし、相手はちらりとその方を見やっただけで、すぐまた行列に眼を移した。

神田の社地から、天王の二の宮が、大伝馬町二丁目の御旅所へわたる時の行列は、当時としては眼をみはらせる豪華さで江戸名物の一つであった。

まっ先に大のぼりが十本立ち、次に太鼓、櫛、神鉦、四神鉦、つづいて又太太鼓、そのあとには眼のさめるような金色の獅子頭が二つつづき、御幣、小太鼓、神輿、神凡、社務の騎馬の順で、夏の陽をきらびやかにほじいてやって来たのである。

「どうだ。素晴らしいものだろう」

こんどは彼の同輩らしいがっしりとした稽古袴が声をかけた。しかし若い長身の方はこれにもべつに答えない。

余程無口なのか、それとも、分りきった事を訊くなどという皮肉なのか、いぜんとして小手をかざしたまま群衆の上から眉根を寄せて行列を見やっっている。

「もし、坂本さん、若先生はもうあちらへ行きましたよ」

行列が目の前をすぎて、あたりの群衆の波が崩れだすと、その輪の中から一眼でそれと分る芸妓らしい女がよって来て肩をたたいたが、それでも彼は、

「分っている」

と、うるさそうに答えたまま歩き出そうとはしなかった。「もし、坂本さん、若先生は、ほら、あっちの路地口で、あなたを待っておいでなさいというのに」

えり白粉を濃くつけて、ぐっと襟あしをぬいた妓は、口傘の尖でじれったそうに向い側をさししめた。

若先生と呼ばれた紹羽織は、いま江戸で大千葉、小千葉と兄弟で剣名をうたわれている千葉周作の弟、千葉貞吉の子の重太郎であり娘はその妹の千賀であった。

「若先生のお供をして来ていながら、迷子になってはいけませんよ。早くいらっしやい」

「分っている」

「分っていたらなぜすぐ追いかけないの。若先生にお嬢さま、それに梅田さんにしてろ、坂本さんの兄弟子じゃありませんか」

「いや、心配ないのだ」

「何が心配ないのですか。ああして待っておいでだというのに」

「心配ないのだ」

この春土佐から出て来て、鍛冶橋外の桶町にある小千葉の道場へ弟子入りした十九歳の坂本龍馬は人に何か問われると、必ず同じ言葉を二度くり返す癖があった。

それも大抵、結論が決心かを短くつづめて先に言うので、何が心配ないのか分るまでに相手はすっかりジリジリ

する。

「今日はな、おれに祭を見せてやると言われた。おれがお供ではない。あっちがお供だ」

「まあ……では、若先生やお嬢さまを待たせるつもりで立っているの、坂本さんは」

「そうだ。癖になる」

「待たしてやらないと……若先生を、自分の師匠の……」

「そうだ、癖になる」

「どんなことが癖になるんですの」

「お前のところへ遊びに行きたくなると、きまっておれに江戸見物させるのだ」

「まあ……」

「おれは、遊びに来たのではない、江戸へ」

「そんな野暮な……坂本さんだって、この暑いのに道場で、汗疹あせらを掻かいているよりも、中洲なかつあたりで大川の風に当たった方がいいでしょう」

「おれは、遊びに来たのではない、江戸へ」

「わかりました。あなたは、他人の恋路の邪魔をする気ですな」

「おれは、恋路を習まいに来たのではない」

「オホホホ、そうでしょうとも。いまの言葉をよく覚えておおきなさいまし、あとで誰が好きだなどと、あたしに言っても知らないから」

そこへ待ちくたびれた千葉重太郎が、一度わたった向う側から、苦笑しながら一人で引返して来た。

「あ、若先生、しばらくでございました。ご機嫌よろしゅう」

取りつくりつた妓の挨拶には答えなくて、

「坂本、見ぬいたな」

と、重太郎は笑った。

「武士は相見互いじゃ。わしは途中で大事な用を思い出したゆえ、おぬし、妹を連れて先に戻れ。そして気が向いたら中洲へ迎えにやって来い」

「気は向くまい」

と、龍馬は答えた。

「大体江戸が気に食わん」

しかし、それ以上には何も言わず、こんどは自分が先になって、さっさと千賀のいる方へ道を横切った。

「お嬢さん、帰りましょう」

と、龍馬は言った。余計なことは口にすまいという要領で、声をかけるともう人波の中を歩きだしている。

「重太郎さんは大事な用がある。先に戻れと言うのです」

「え？ 何と言いましたの。兄さんは、また遊びに行くので、あたし達はお払い箱なの」

空気を察して千賀は龍馬に迫おりながら、半ば甘えた悪戯たづねっぽさで問いかけた。

龍馬はそれにも答えず、

「江戸という所はおかしなところだ」

「どうして？ 土佐の高知よりはよいでしょう」

大通りを本銀座二丁目へ曲るとそこはもう神輿渡りの群衆はなく嘘のように静かであった。二人は陽蔭ひかげをよるようにして宝永橋の方へ歩きながら、

「ねえ、どんなところがおもしろいの、江戸の……」

「何も彼もおかしい」

「例えば？」

「芝居の役者が千五百両も給金を取る」

「あ、そのことなの、それから……」

「剣術の先生が、小唄に熱をあげている」

「兄のことなのねえ……」

「旗本が三味線をひいたり、踊りを習ったり……」

「オホホホ、芸ごとは、それは人それぞれの趣味ですもの」

「とにかく好かん。金や力は入用なところへ使うものだ。それが、みんな要らぬところへ使われている。何かと言え

ば、吉原と料亭と女と芸ごと、そして詰まらぬ黄表紙本ばかり読んでる」

千賀は到頭腹をおさえて笑いだした。

「坂本さんもやっぱりみんなと同じことを言います」

「みんなと同じこと」

「そうです。あの梅田さんにしても、来た当座はブリブリ怒ってましたわ」

梅田梅太郎は越後領の郷土ごうしの倅せがれだということ、見かけはひどく野暮のぼろったかったが、今では重太郎の腰巾着こしえちやくになっている。

「おれは、梅田と同じではない」

「というと、高知で、料亭や遊廓あそびわへ行かなかつたの坂本さんは」

「そんな不用なものが高知にないッ」

と、龍馬は吐きすてるように答えた。

「だからおれは江戸を好かんのだ」

「まあ……高知は料亭もないんですの？」

「無いからおかしな妓きもない。高知は……」

と、龍馬はふと眼を細めた。

眼を細めると、この春出て来た故郷の風物が、くつきりと臉おもてにうかんだ。

鏡川の川原から、ふり返った城の姿、下流にひらけた南画を見るような五台山。真向いの筆山からその麓の天満宮の静かな佗び。

そこには少なくとも熟うれすぎた文化の腐臭はなかった。粗野ではあったが健康な空気がつねに清々すがすがしく流動している感じであった。

(江戸はもはや腐りかけている……)

老いも若きも、何が人生の第一義であるかを見失って、末梢の悦楽だけを追いかけている。

盗賊と火事の多いこと。売女と無職者と、喧嘩と埃のうず巻きの中で、人々は食うことと、着ることと、遊ぶことだけに浮身をやつしている……と、そこまで考えた時に、ドンと龍馬にぶつかった者がある。

「やいッ、気をつけろ田舎者ッ」

怒鳴ったのは、龍馬でなくて、猪のように永富町の路地から駆け出して来た五分月代の浪人だった。

相手は明らかに、女連れと見て向うから打つかって来ているながら、

「うぬは盲かッ。見ろ、草履の鼻緒が切れた。どうするんだ」

龍馬が一步さがると、片裾とったまま唾をとばして詰めよった。

(これも江戸のホコリの一つだ……)

腹が立っている時だけに、龍馬もぐっと胸をそらして刀の柄に手をおいた。

相手の腕は分らなかつたが、故郷の高知で、十四歳から築屋敷の日根野弁治の道場に通い、日根野の添書をもつて、桶町の千葉貞吉のもとへ北辰一刀流の修業に来ている龍馬であった。

路傍で喧嘩を売って来るような無頼な浪人に、みすみす横車を押させるほど血の気の少ない生れつきではない。

彼が刀の柄に手をおくと、案のごとく、相手は一層猛った威嚇に移った。

「おやッ、うぬの方から、人に突き当り、鼻緒を切らせて裸足にしておきながら、斬ろうというんだな。こりゃ面白い！ さあ、斬れるものなら斬ってみろ」

こんなことは別に珍しいことではない。江戸のそここで寸秒も絶えたことのない、禄からも生産面からも離れて徒食する者の生きる手段であり職業でさえもあつたのだ。「斬ってええのか」

「おう、斬って貰おう。ここは公方さまのお膝元だ。白昼そんな無法が許されるものかどうか。斬った上で思い知るがいいや」

相手にまたぐっと肩を寄せられて、若い龍馬の頬にはサッと一度殺気が走った。

相手も馴れていると見えて、それを見るとビョンときがった。退ると同時に、千賀の方へ向き直つて、

「こいつぁお前のお供だろう。ここでこんな無法させてそれで済むのか」

と、食つてかかった。ほんとうに斬られてはたまらない。こちらで女の方へ銚先をそらし、何がしかの金にしようという手順はひどくあざやかだった。

が……！

ぐいっと千賀に体を寄せた瞬間「痛ててて」と、顔を

しかめて浪人の体はくるりと宙へ輪を描き、乾ききった地面へパツと大きく土煙を舞わせて落ちていった。

いつの間に集まったのか「ワーツ」と十二、三人の弥次馬が歓声をあげた。逆を取って投げた千賀がそのまま日傘を持って歩きだしたからであった。

「フン」と龍馬もあとに続いた。

はじめて見た千賀のもう一面であった。

鼓と、琴と活花に明けくれているかに見えた千賀が、この分では相当武道もたしんでいるらしい。

(江戸の女も満更捨てたものではないのかな)

少年らしい単純さで、ふとまた故郷の姉の乙女を思いうかべ、自分の身を自分で守れるとは大したものだ……そう思った時に、

「ワーツ」とまたうしろで妙などよめきが湧きあがった。

一人一人は、わが身を守るすべを知っていても、国そのものを守り得なくなっている、これが皮肉な「黒船渡来」の江戸の市民にもたらした第一の波動であった。

ギョツとして振返った龍馬と千賀の眼に、蠟燭町から皆川町の方へ火事場の避難民に似た荷車三台が、一団の人とともに矢のように走ってゆくのが見えた。

「何んだらう?」

龍馬が立ちどまった時には、千賀はもう通行人の一人を呼びとめて都会育ちらしい人懐っこさで訊ねていた。

「火事じゃないんでしょう。半鐘は鳴らないから」

「黒船だつてよ、黒船」

「黒船って何んですの?」

「どてつもなく大きな、まっ黒な鉄の船さ。それが伊豆の下田の海から、品川沖へ攻めこんで来るといふんだ」

「それは……いったいどの国の?」

「そんなことまで分りませんや」

千賀に訊かれた職人風の男はこの娘との対話よりも、つづいて流れて来た人波に興を覚えたらしくそのまま背をまるめるようにして駆け去った。

むろん龍馬も千賀も、この前々日、米国の水師提督ベルリが、四隻の軍艦をひきいて浦賀にやって来て、浦賀奉行の戸田氏栄に、国書の取次を頼んだことなど知る筈はなかった。

奉行は国法のゆえをもって、これを拒んだ。

「——外国のために開かれた港は長崎一港、まず長崎へ回航して、正規の手続きを踏むように」

しかし、ベルリはこれをきき入れず、

「——取次がなければ、このまま江戸湾へ入って行って直接將軍と談判する」

そう答えて、本牧沖へ向つたのだから五日にはもう、幕閣たちは大混乱におちていたのだが、当時の坂本龍馬はそうした出来事とはまだ全く無縁な、一個の剣術修業者にす

ぎなかつた。

むしろ千賀の方が、兄や父に度々、外国船の近海出沒のことなど聞かされているので、

「とにかく急いで帰ってみましょう。流言にしても気にかかります」

龍馬をうながして桶町の道場へ急いだ。

その間にも刻々に江戸の波紋は凶相を加えていった。

すでに、長門、肥後、越前、彦根の四藩には江戸沿岸警備の内命が下り、それぞれ人数が繰出されようとしていたのだから無理もない。

そのうちに誰言うともなく、大きな大砲を積んだ黒船の姿を見て来たという噂までひろがった。

「お戻ったか。待っていたぞ」

龍馬が道場へ着くと、人氣のない師範台へひっそりと坐っていた千葉貞吉、

「重太郎はどうした。一緒ではなかつたのか」

と、急ぎ込んでたずねた。

「はい、先に帰れと言われましたので」

「よし、行先は分つていよう。各藩からの預り弟子は、みな、それぞれ藩邸へ帰した。坂本も重太郎を連れて築地河岸の中屋敷へ入るよう。重太郎によく言ってくれ、ついに国難はやって来た！土佐藩邸に立籠つて、藩士と共に日本人の職責を立派に果たすよう」

龍馬はこんな昂ぶっている貞吉を見るのは初めてだったので、一瞬ボカンと立尽した。

何の子備知識もない彼には、国難だの黒船だの、藩邸に立籠れのと言葉が「日本人の職責」という妙に重苦しい一言とともにわずかに心に残っただけであった。

(フーム。芸妓買いをしている息子に、日本人の職責か……)

と、言つて、訊き返すのも面倒に思えたので、そのまま又、のっそりと道場を出ていった。

意味のわからぬ騒ぎというものは妙なものだつた。

べつに恐怖も覚えぬ代りに、昂奮もして来ない。或いはこれが弥次馬の心理でもあろうか。

「——急いで重太郎を連れて土佐藩邸へ立籠れ」

龍馬は何度か口の中で貞吉の言葉を繰返しているうちに、

(あのオヤジ、ひどいあわて者だぞ)

腹の底から可笑しさがこみあげた。

千葉貞吉は剣道の師であっても藩主でもなければ土佐藩の重役でもない。それが、中屋敷を自分のものでもあるかのように命令を下している。

気が転倒しているのか、それとも親バカで、自分の子を買いかぶり、

「——あの時にはちゃんと、わしの代りに重太郎を詰めさせておきました」とでも言う気なのか。

それにしても、この騒ぎの原因がよくのみ込めない。

日暮れになっていよいよ波紋は大きくなり、避難民の群の中を、片肌ぬいだ騎馬の侍があわてて行き交ったりするのだが、その反対に、至極のんびりしている市民もあれば、ハッキリ弥次馬とわかる者も少なくない。

「おい、黒船はメリケンの船だっというぞ」

「メリケンの船がどうしたのさ」

「気をつけねえ。奴等は江戸の娘ッ子の生血をしぼりに来たんだとよ」

「また留さんが嘘ばっかり」

そんな会話も所々で耳にする。そうなると人間は、あわてている者より、落着いている者が立派に見える。

中洲へやって来て重太郎が遊びつけの船芳の前に立ち、中から洩れる三味線の音を聞くと、

「こりゃ、重太郎さんの方が一枚うわ手だ」

龍馬はニヤリと笑って打水した玄関へ入っていった。

「若先生を呼んで呉れ」

「ああ桶町の若先生ならば……」

出て来た女中が帳場をふり返って、

「お帰りになりました、ねえおかみさん」

そう言うと、龍馬はのっそりと玄関をあがった。

「居留守、だめだ。おれがいく」

「あら、ほんとうにお帰りに……」

「まだ帰らない。あそこにせったがおいてある」

女中がひどくあわてておかみさんになにか言ったが、龍馬はそんなことにこだわってはいなかった。

この船宿へは、重太郎に連れられて三、四度来たことがある。

来るたびに重太郎は、今日昼間御旅所のそばで出逢った小芳という妓を呼んで、下手な小唄を唄ったり、膝枕をしてふざけたりした。

その癖言うことだけはいつも立派で、英雄閑日月ありとか、静かに逸せよだとか気取ったことを言い、龍馬が相手にならずに酒をのんでいると、

「——おい、傾城買いに連れていこうか。吉原は言わば若者教育の大学じゃぞ」

などとも言った。

そんな重太郎ゆえ、龍馬の方も遠慮はない。彼はさっきと廊下をふた曲りして、川に沿った二間つづきの座敷の障子を声もかけずにさらりと開け、

「あ……」

と、思わず眼をみはった。

当然重太郎は、小芳と二人でいつものように、他愛のない戯れごとの応酬を繰返しているのだろう——そう思って